

岐阜県塚奥山遺跡の線刻絵画土器とその周辺

三輪 晃三

1 はじめに

塚奥山遺跡は岐阜県揖斐郡揖斐川町に位置し、揖斐川最上流の河岸段丘上に立地する。平成8年度から14年度にかけて財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが発掘調査を行い、縄文時代中期後葉から後期前葉を主体とする集落跡を確認した（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a）。小稿では、当遺跡から出土した縄文時代後期前葉の線刻絵画土器（以下「塚奥山No.469」という。図1右）の位置づけを検討する。

2 塚奥山遺跡出土の線刻絵画土器

（1）研究の状況

縄文時代後期前葉の器面に縄文を施した土器を取り上げた研究は、比較的少ない。縁帯文土器の成立¹⁾・展開の過程を示した泉拓良氏と千葉豊氏は、口縁部と胴部に縄文を施した「縄文地深鉢・鉢」が北白川上層式1期の主要な器種であり、千葉氏は東日本との関連で成立する可能性を指摘した（泉1981、千葉1989）。また、東海地方西部では権現山式から蜷塚Ⅲ式にかけてLRが圧倒的に優勢で、近畿地方以西との間に地域色が存在するとした（千葉2008）。植田文雄氏は、滋賀県正楽寺遺跡の調査で主に自然流路から出土した縄文土器を層位的に分析し、小稿で検討する「体部全面に縄文を施すもの」（C7類）は中津式併行から正楽寺2式にかけて存続し、同3式に消滅したことを示した（能登川町教育委員会1996）²⁾。幸泉満夫氏は、縁帯文土器成立期に中国・四国地方周辺的全縄文浅鉢を母胎として頸部を無文化した浅鉢が「口胴縄文系深鉢」（泉氏や千葉氏のいう縄文地深鉢）を誕生させ、北白川上層式1期併行に定型化するとともに近畿地方に拡散したと説明した（幸泉2009a）。また、同氏は植田氏のC7類を含めた「口縁部外面を中心に、主に口縁～胴部外面にかけての範囲を全面縄文のみで加飾する素文系統の土器」を「全縄文土器」と定義して西日本を概観し、北陸・中部地方の縄文時代中期末から後期初頭ではRLが優勢で、中期末では全器種口縁中の全縄文土器が占める割合は1割未満であるが後期初頭には2割を超える遺跡も存在し、気屋式期では頸部が強く屈曲し粗い縄文原体を用いる全縄文土器が盛んに製作され、北白川上層式3期以降、北陸地方を除いて一斉に消滅したと述べた。（幸泉2009b）。

（2）遺物の出土状況と所属時期

塚奥山No.469は、幸泉氏のいう全縄文土器の深鉢（口径32.8cm、器高40.8cm以上）で、胴部の一部と底部を除きほぼ完存する。全体の器形としてはバケツ状に開き、胴部の中程が外側にやや膨らむ。口縁部外面から胴部上半にかけて節の太いLR縄文を横位又は斜位に、胴部下半では縦位に転がす。この土器は堅穴建物SB9の埋土上部で破片が重なるように出土し、土器片に伴う土坑は確認できなかったことから建物廃絶後の遺物集積（SU3）に伴うとした。堅穴建物の埋土には長径30cm以下の亜円礫が多く含まれるため、堅穴を人為的に埋め戻したと思われる。SB9の埋土から出土した土器は縁帯文土器成立期から北白川上層式1期併行までの時期幅があるが、SB9埋没後に造営された掘立柱建物（SH7）と堅穴建物（SB19・20）との先後関係を整理したところ、SH7は縁帯文土器成立期のSB19・20よりも古いと考えられ

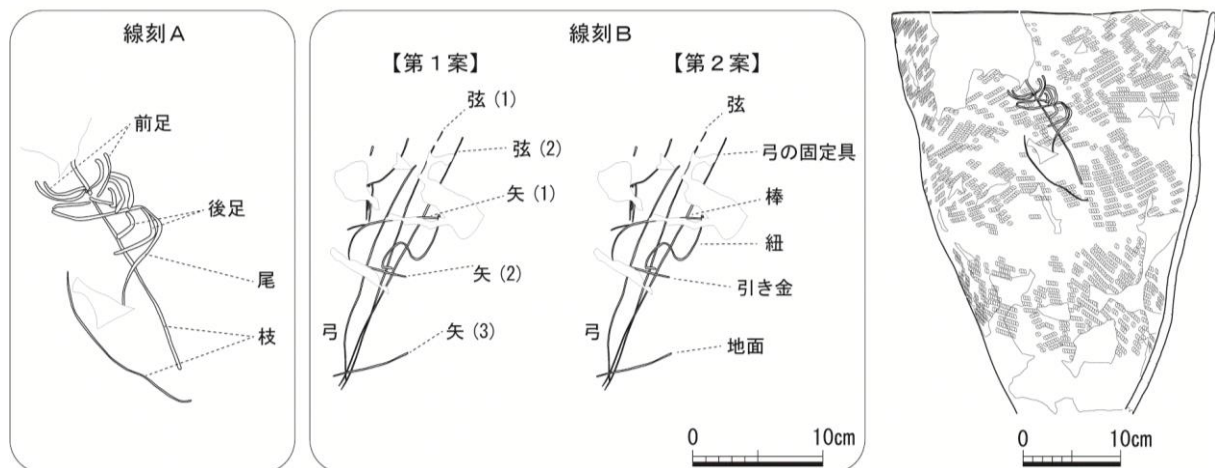


図1 塚奥山遺跡出土線刻絵画土器

ることからSU3も縁帯文土器成立期とした³⁾。

(3) 線刻画

線刻は胴部上半2箇所（線刻Aから反時計回りに約150度回転すると線刻Bに到達）にあり、「線刻A」、「線刻B」と呼称する。線刻Aは棒状の工具（沈線内に条線状の筋が観察できる）、線刻Bは先端の鋭利な工具を用いどちらも土器焼成前に描いている⁴⁾。

線刻A

線刻Aの解釈には、以下の3つの案がある。「第1案は槍を一本線で線描し、人物がこれを持っている。第2案は樹木の枝を一本線で線描し、これに動物が留まっている状況であり、開放する平行沈線の上部は腕、三股に分かれる下部は足と尻尾を表現する。長い尻尾からサルとみることができようか、第3案は狩りにより射止めた動物を一本の棒に固定した状況であり、第2案と同様に、腕と脚の解釈は同じである」（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a第2分冊-44頁）。

第1案について、頭部、目・鼻・口の表現がないため人物と認定するには躊躇せざるを得ない。また、第3案については、線刻Aの右側に描かれない地面つまり「基底線」（佐原・春成1997-266頁）を想定すると、動物の尻尾が上を向くこととなり不自然である。線刻Aでは縦方向の線が左斜め上に、また線刻Bでは右斜め上に描かれていることから、両者で一对の絵画を構成する可能性が高い。線刻Aの斜め左上がりの線は2本とも1本の線で引かれ、並行する直線ではなく線の途中で屈曲していたため枝を表現したものと考えられる。前足は左右対称に2本の線が伸びるが後足は左右非対称であるため、上半身は正面観、下半身は側面観を描いたものと理解したい。第2案として示したように、上半部の2本線は両腕（四肢獣であれば前足）、3本線は胴体で、両足（四肢獣であれば後足）と尻尾を1本線で表わす。さて、問題となるのは陸獣の種類の特定である。サルの動物形土製品⁵⁾では尻尾が短いのが通例であるが、線刻画では誇張して描くとは考えにくいので、報文で示したサル説は撤回しておきたい。ただし、長い尾を持つ樹上動物とは考えられるものの、線刻画の形状から具体的な種類を特定するには憶測の域を出ない⁶⁾。

線刻B

線刻Bは弓矢が描かれ、矢に紐を繋いでいる。具体的には、大きく弧状に描かれた線が弓本体、右斜め上に向かって直線的に描かれた線は弦と考えられ、弦と弦に直交する短沈線が2組存在する点が課題とな

るが、これについては2つの案が考えられる。

第1案は、弓矢猟を表現したものである。標的を狙って図1一矢(1)を構え、弦が(1)から(2)へ引っ張られるのに伴い、矢(2)を引き始める。連続する時間の経過は「紐」で結ばれ、一番下の線ではすでに落下している矢(3)を表現しているのかもしれない。

第2案は、仕掛け弓を表現したものである。アイヌの民族例では、「アマクー」又は「アマッポ」と呼ばれており（バチラー1995、宇多川1996）、仕掛け弓から距離をおいて打設した棒（又は木）に向けて紐を引っ張り、その紐に動物が引っかかると自動的に矢が発射される。仕掛け弓⁷⁾は、①弓、②引き金を伴う弓の固定具、③紐、④棒又は木で構成される。これを線刻Bと比較すると、①弓は第1案と同様で、右斜め上に向かって直線的に描かれた線のうち左側の1本は弦、右側の1本は②引き金を伴う弓の固定具。逆S字状に描かれた線は③紐で、②引き金と④棒に繋がれている。以上の対応関係が妥当であるならば、線刻Bは仕掛け弓が機能する姿ではなく地面に立てかけられた状態を描いたもので、矢尻が示されていないことからここには矢が描かれていないと理解しておきたい。

3 岐阜県内の縄文時代の絵画・造形

岐阜県内の縄文時代の線刻画、動物意匠の突起・把手類、顔面把手について確認する（図2・表1）⁸⁾。

図2-1は、深鉢の口縁部から胴部上半にかけて渦巻文から6本指を持つ腕が伸び、頸部を挟んで上下対称に配置されている。前期末の十三菩提式に位置づけられている。2は、口縁部に動物意匠突起が付く。半截竹管文と玉抱三叉文によってミミズクの顔を表現し、新道式との類似が指摘されている。3は、深鉢の口縁波頂部の内側に動物の顔が付けられ、切れ長の目・鼻孔・口が刺突によって表現され、「新道式との関連を持った新崎式の最新期」（小島1995-131頁）に位置づけられている。4は、鉢の胴部に動物意匠突起が付き、上山田・天神山土器様式に位置づけられている。5は、台付鉢の波頂部下に動物意匠突起が付く。目の表現ととれる短沈線を入れた隆帯を2個組み合わせた「柿の種顔」（小島1995-132頁）とも評され、鼻孔はないが口を開けている。連続刻みを入れた隆帯は胴体又は腕で、「柿の種」と反対側の端部に3本指が付く。6は、深鉢の把手上に5に類似する顔が付き2個の鼻孔が加えられている。7は、深鉢の口縁部に動物意匠文が付けられており、6とともに上山田式併行に位置づけられている。8は、口縁部の眼鏡状突起から両生類のものとされる3本指が伸びる。9は、オオサンショウウオ状の抽象文の尾部。8・9ともに藤内式に比定されている。10は、深鉢の口縁端部に口を大きく開け尻尾を巻いた動物意匠突起（へび）を付ける。胴部の縦位区画にI J字形懸垂文を施文し、藤内式（勝坂2式）に併行する（今福2008）。11はミニチュア土器に細い道具を用いて描かれているが、意匠の解釈や時期ともに不明である。12~18は顔面把手⁹⁾。12は隆帯で頭髮・耳・顔の輪郭・眉毛を表し、円形の目と富士山形の口を開ける。類似する顔面把手は新道式期に位置づけられている（三上2018）。13・14は、隆帯で眉毛・鼻をT字状に繋ぎ、顔を縁取る。12とは異なり目は短沈線、口は刺突に近い。12・14は隆帯で頭髮を渦巻き状に結ぶ。15~18は眉毛の表現がなく、顔の輪郭と鼻、顔の隆帯脇の沈線と目の刺突が各々連結する。これらのうち、13・17は縄文土器との共判関係は不明であるが、18は竪穴建物の埋土上層から中期末の土器と共伴したことが報告されている。19は砂岩製の線刻礫（長さ16.3cm、幅8cm）。表面に5尾の魚形が刻まれ、魚の種類はサケ・マス（清見村教育委員会1983）又はアユ（清見村教育委員会1990）と推測されている。出土した1号住居址は曾利Ⅲ式に併行するが、線刻礫の帰属時期は不明である（中沢2006）。



図2 岐阜県における縄文時代の絵画・造形

表 1 岐阜県における縄文時代の主な絵画・造形一覧

番号	遺跡名	所在地	器種等	時期	備考
図 1	塚奥山遺跡	揖斐郡揖斐川町	深鉢	後期前葉	線刻画（動物文・弓矢文）
図 2-1	峰一合遺跡	下呂市	深鉢	前期末	動物意匠文
図 2-2	宮ノ下遺跡	高山市国府町	器種不明	中期中葉	動物意匠突起
図 2-3	下田遺跡	高山市河合町	深鉢	中期前葉	動物意匠突起
図 2-4	赤保木遺跡	高山市	鉢	中期中葉	動物意匠突起
図 2-5	堂ノ前遺跡	飛騨市宮川町	台付鉢	中期中葉	動物意匠文
図 2-6	堂ノ前遺跡	飛騨市宮川町	深鉢	中期中葉	動物意匠把手
図 2-7	堂ノ前遺跡	飛騨市宮川町	深鉢	中期中葉	動物意匠文
図 2-8	阿曾田遺跡	中津川市	深鉢	中期中葉	動物意匠文
図 2-9	阿曾田遺跡	中津川市	器種不明	中期中葉	抽象文
図 2-10	森ノ下遺跡	高山市朝日町	深鉢	中期中葉	動物意匠突起
図 2-11	西田遺跡	高山市丹生川町	ミニチュア土器	不明	線刻画（文様意匠不明）
図 2-12	南垣内遺跡	高山市小坂町	器種不明	中期中葉	顔面把手
図 2-13	堂ノ上遺跡	高山市久々野町	器種不明	中期後葉か	顔面把手
図 2-14	垣内遺跡	高山市	器種不明	中期後葉	顔面把手
図 2-15	門端遺跡	高山市清見町	器種不明	中期	顔面把手
図 2-16	門端遺跡	高山市清見町	器種不明	中期	顔面把手
図 2-17	堂ノ上遺跡	高山市久々野町	器種不明	中期後葉か	顔面把手
図 2-18	堂ノ上遺跡	高山市久々野町	器種不明	中期末か	顔面把手
図 2-19	門端遺跡	高山市清見町	礫	不明	線刻画（魚文）

4 塚奥山No.469 と狩猟文土器の比較

塚奥山No.469 の線刻 A では動物、線刻 B では弓矢を描いていると解釈したが、この組み合わせは動物文・弓矢文が施された「狩猟文土器」（斎野 2006・2008）と類似する。そこで、斎野裕彦氏が指摘する狩猟文土器の主な特徴を掲げ、塚奥山No.469 との相違点を下線で示す。

- ①狩猟文土器は中期末から後期前葉にかけて認められ、東北地方と北海道渡島半島に分布する。
- ②器種については、全時期を通じて深鉢が多いが後期初頭には壺が多い。
- ③狩猟文土器は、人体文を施さないもの（A類）と施すもの（B類）、いずれか不明なもの（C類）に大別され、中期末に東北中南部でB類が出現し後期初頭に北部から渡島半島に及んでA類が成立したと考えられている。
- ④狩猟文の文様単位は2又は4単位で、文様要素には弓矢文、動物文、抽象文、樹木文がある。
- ⑤弓矢文は、弓又は弓に矢をつがえた状態を意匠化したもの。弓矢文の施文方法には無文上に粘土紐を貼り付けて隆線（a1）又は隆帯とするもの（a2）と、無文上に平行沈線を引き沈線間に縄文を施すもの（a3）があり、a1 は中期末から後期初頭にかけて確認されているが、a2・a3 は後期初頭に限られる。
- ⑥動物文は、イノシシ又はクマを上から見た状態、又はシカを横から見た状態を意匠化したもの。動物文

の施文方法には、無文上に粘土を貼り付けて動物形に成形するもの（b1）又は粘土紐により隆帯で動物形とするもの（b3）、動物の輪郭に沿って隆線にするもの（b2）、地文上に粘土紐を貼り付けて隆帯で動物形にするもの（b4）があり、b1 は中期末から後期初頭にかけて確認されているが、b2 は中期末、b3・b4 は後期初頭に限られる。

⑦狩猟文土器の時期別出土状況について、中期末から後期初頭では竪穴建物跡の床面又は埋土、後期初頭では土坑群や広場から出土する傾向があり、狩猟文土器を祭器として狩猟儀礼を行う場所が屋内から屋外に移動したと考えられている。後期前葉では狩猟文土器はほぼ消滅し、四肢獣形の動物形土製品に移行する。

5 まとめ

岐阜県における縄文時代の絵画・造形には、中期中葉の北陸地方や中部地方との関連を窺わせる動物意匠突起・把手類や顔面把手が多く、うち顔面把手は飛騨地域において在地的变化を遂げ中期後葉頃まで残存するようである。しかし、後期以降については線刻画を含めて極めて少ない。

塚奥山No.469 は、弓矢文・動物文を意匠化した文様を施す点では狩猟文土器の特徴と類似するものの、施文方法は狩猟文土器と決定的に異なる。また、後期前葉に弓矢文・動物文を施す狩猟文土器は全国的にも知られておらず、この土器が狩猟文土器の分布範囲から大きく離れている点も勘案すると、両者の関係を議論することには慎重を期すべきであるが、他方で岐阜県の周辺を含めて弓矢文・動物文の線刻画の系譜を説明することも難しく、今後の資料の蓄積を待って評価する必要がある。

注

- 1) 近畿地方の「四ツ池式」（泉・玉田 1986）は型式学的に福田K 2式（新段階）と広瀬土壙 40 段階（千葉 1989）に区別され、広瀬土壙 40 段階に後続する型式として芥川式（高槻市教育委員会 1995）が設定された。現在では「四ツ池式（広瀬土壙 40 段階）」と併記する場合と、四ツ池式又は広瀬土壙 40 段階いずれかの名称を用いる場合がある。なお、千葉 2008 では四ツ池式（広瀬土壙 40 段階）と芥川式を「縁帯文土器成立期」として位置づけており、報文では両者を細分できなかったことから小稿ではこの区分を用いる。
- 2) 玉田・岡田 2010 では、正楽寺 1 式及び同 2 式は北白川上層式 1 期、正楽寺 3 式及び同 4 式は北白川上層式 2 期に各々相当すると考えられている。
- 3) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a—表 46 を参照いただきたい。
- 4) 別の工具であるか、両端の形状が異なる同一の工具であるかは不明である。
- 5) 設楽 2008 では、十面沢遺跡（青森県弘前市）、真福寺遺跡（埼玉県さいたま市）出土資料などが紹介されている。
- 6) 縄文時代後期の陸獣最少個体数の集計では、シカ・イノシシが全体（1,744 個体）の 75%を占め、他にタヌキ、ノウサギ、アナグマ、サル、ムササビ、キツネ、カワウソ、テン、オオカミ、イタチ、クマ、カモシカ、ヤマネコが知られている（西本 1991）。これらのうち、長い尾を持つ樹上性動物に限定すると、ムササビ・テン・ヤマネコが候補となろうか。
- 7) 考古資料としては、引き金の可能性のある数点の骨角器を除いて知られていないという。また、ロシア極東の先住民（樺太アイヌ・ウデヘ・ナナイ等）では、I A a 1 タイプの仕掛け弓を用いて大型獣から小型獣（テン、クロテン、オオヤマネコを含む。）が捕獲されている（宇田川 1996、65・68 頁）。
- 8) 先学の研究等（岐阜県博物館友の会 1992、吉本・渡辺 1994、小島 1995、堀澤 2004、中沢 2006）や各発掘調査報告書の分類や記述を参考に、土偶・土製品を除いて主なものを集成した。線刻画の判断基準には「当該土器の型式や様式に共通する文様構成および施

文の単位や順序から独立した沈線描画を根拠とする」(宮尾 2008—1210 頁) ことが提案されており、図 2—11 も線描画として取り扱った。しかし、ミニチュア土器は「儀器・祭祀用具」(菅野 2008—1091 頁) としての機能が指摘されており、小型ゆえに簡略化された文様も見受けられるため、通常の土器と同様に線描画として扱うべきかどうか今後の課題である。

- 9) 名称については、他に「顔面装飾」・「人面装飾」がある。全国的な集成・分類(吉本・渡辺 1994)によると、岐阜県内の資料では口縁部より上にあるタイプ(Ⅲ類)で顔の向きが不明なものが多いが、図 2—13 は顔が外向き(ⅢA類)に分類されている。なお、両氏は表 1 以外に山本遺跡(下呂市)で中期初頭の資料(口縁部直下にあり顔が外向きのタイプ(ⅡA類))、荒城神社遺跡(高山市国府町)で中期後半の資料、下島遺跡(恵那市福岡町)で時期不明の資料を紹介されているが、いずれも図・写真は公表されていない。

挿図の出典

図 1 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007a 第 2 分冊—図 61 を再トレース

図 2 1 : 下呂町教育委員会 2003—第 22 図、2 : 国府町教育委員会 1988—挿図 26、3 : 河合村教育委員会 1987—挿図 71・図版 39、4 : 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007b—第 76 図、5～7 : 岐阜県・宮川村教育委員会 1996—第 29 図、第 35 図、第 36 図、8・9 : 中津川市教育委員会 1985—第 303 図(無断使用禁止)、10・12 : 岐阜県博物館友の会 1992—巻頭写真 12・p 19(無断使用禁止)、11 : 財団法人岐阜県文化財保護センター 1997—挿図 271、13・17 : 久々野町教育委員会 1997—第 43 図・第 160 図、14 : 高山市教育委員会 1991—挿図 279、15・16・19 : 清見村教育委員会 1983—図 17・47

参考文献

- 泉拓良 1981 「近畿地方の土器」『縄文土器の研究』第 4 巻(縄文土器Ⅱ)、雄山閣出版株式会社
- 泉拓良・玉田芳英 1986 「文様系統論—縁帯文土器—」『季刊 考古学』第 17 号、雄山閣出版株式会社
- 今福利恵 2008 「勝坂式土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
- 宇田川洋 1996 「アイヌ自製品の研究—仕掛け弓・罌—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 14 巻
- 河合村教育委員会 1987 『奥飛騨の縄文遺跡 下田遺跡』
- 菅野和郎 2008 「ミニチュア土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
- 岐阜県・宮川村教育委員会 1996 『岐阜県吉城郡宮川村 堂ノ前遺跡発掘調査報告書』(国道 360 号線バイパス改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告)
- 岐阜県博物館友の会 1992 『特別展 飛騨のあけぼの 展示図録—交流する縄文・古代人—』
- 清見村教育委員会 1983 『門端縄文遺跡発掘調査報告書』
- 清見村教育委員会 1990 『はつや遺跡発掘調査報告書』
- 久々野町教育委員会 1997 『堂之上遺跡』
- 下呂町教育委員会 2003 『峰一合遺跡(発掘調査報告書)』
- 幸泉満夫 2009a 「中国・四国地方における口胴縄文系土器群の成立と展開」『島根考古学会誌』第 26 集、島根考古学会
- 幸泉満夫 2009b 「西日本の後期全縄文土器—粗製土器からみた東日本縄文文化の影響—」『古文化談叢』第

61 集、九州古文化研究会

国府町教育委員会 1988『岐阜県古城郡国府町宮ノ下遺跡発掘調査報告書』

小島俊彰 1995「北陸生まれの縄文土器動物」『飛騨と考古学 飛騨考古学会 20 周年記念誌』、飛騨考古学会
財団法人岐阜県文化財保護センター1997『西田遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a『塚奥山遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007b『赤保木遺跡』

斎野裕彦 2006「狩猟文土器と人体文」『原始絵画の研究 論考編』、有限会社六一書房

斎野裕彦 2008「狩猟文」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

佐原真・春成秀爾 1997『歴史発掘⑤ 原始絵画』、株式会社講談社

設楽博己 2008「縄文人の動物観」『人と動物の日本史 1 動物の考古学』、株式会社吉川弘文館

ジョン・バチラー1995『アイヌの伝承と民俗』(安田一郎訳)、青土社(原著: John Batchelor. The Ainu and
Thir Folk-Lore. The Religious Tract Society. London. 1901.)

高槻市教育委員会 1995『芥川遺跡発掘調査報告書—縄文・弥生集落跡の調査—』

高山市教育委員会 1991『垣内遺跡発掘調査報告書』

玉田芳英・岡田憲一 2010「5. 近畿」『西日本の縄文土器 後期』、有限会社真陽社

千葉豊 1989「縁帯文系土器群の成立と展開—西日本縄文後期前半期の地域相—」『史林』第 72 巻第 6 号、
史学研究会

千葉豊 2008「縁帯文土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

中沢道彦 2006「中部地方の原始絵画研究の現状と課題」『原始絵画の研究 論考編』、有限会社六一書房

中津川市教育委員会 1985『岐阜県中津川市阿曾田遺跡発掘調査報告書』

西本豊弘 1991「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」『古代』第 91 号、早稲田大学考古学会

能登川町教育委員会 1996『正楽寺遺跡 (5 次調査)』

久田正弘 2006「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究 論考編』、有限会社六一書房

堀沢祐一 2004「北陸地域の動物意匠について」『考古学ジャーナル』No.515、株式会社ニューサイエンス社

三上徹也 2018「縄文時代中期・顔面様装飾把手の変遷から水煙把手への変質と背景」『日本考古学』第 45
号、一般社団法人日本考古学協会

宮尾亨 2008「線描画」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

吉本洋子・渡辺誠 1994「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第 1 号、一般社団法人日本考
古学協会